文部科学省国際原子力人材育成イニシアティブ事業(原子力人材育成等推進事業費補助金) 令和6年度終了課題



筑波大学 大学院特別 プログラム

# ENEP

Expert Program for Environmental Management of Nuclear Emergency and Disposal Radioactive Waste

原子力緊急時の環境影響評価と廃棄物処理・処分を支える人材育成

筑波大学 放射線・アイソトープ地球システム研究センター センター長 恩田 裕一

参画機関:東北大学(桐島 陽)



## プログラムの背景と目的

#### 第一期 (2015-2017年度)

原子力災害による環境・生態系影響リスクマネージメント 人材育成事業

福島第一原子力発電所事故後、**原子力災害による環境・生態系への影響評価**や測定・ モデリング技術を有した人材の不足が露呈。



環境科学分野の大学院生を主な対象とし、環境中の放射性核種動態

を体系的に学ぶことのできる 原子力人材育成を開始。



#### 課題

- ✓ 本学では初めて環境科学専攻から日本原子力研究開発機構に人材を輩出するなど の成果をあげることができたが、地層処分に深く関係する本学の地球科学分野で は原子力分野への人材輩出がほとんどできていない。
- ✔ 福島事故関連の研究が縮小されていく中で、若い世代に福島の現状と課題を伝え る場、あるいは若い研究者を次の講師として育成する場として、プログラムの維持・ 拡大が重要。



### プログラムの背景と目的

#### 第二期 (2019-2021年度)

原子力緊急時対応と放射性廃棄物処理・処分を支える 高度人材育成事業

長泥地区 再生利用実証事業見学

前プログラムの科目を精査・改善するとともに、放射性廃棄物の処理・処分にかかわる 地球科学に関する講義科目「地質災害・地層環境評価論」および「国内実習」「海外イン ターンシップ」を新設。



地球科学分野の大学院生を対象 にプログラムを拡大。

#### 課題

- ✓ 電力関係の企業・研究所にも人材を輩出できたが、3年間のプログラム修了生(5科 目以上を履修した学生)の数が22名(各科目履修の述べ人数は355名)であり、さ らなる履修生増加のためには他大学の学生を対象にする必要がある。
- ✓ コロナ禍のため、予定していた海外実習に行くことができず、とくに放射性廃棄物 の処理・処分にかかわる実地実習がほとんどできなかった。



### プログラムの背景と目的

第三期 (2022-2024年度) 原子力緊急時の環境影響評価と廃棄物処理・処分を 支える人材育成

- ◆ 原子力工学(東北大学 桐島陽教授)と新たに連携し、地層処分教育を強化。 アメリカ(WIPP)やスイス(モンテリ地下研究所) など海外の地層処分施 設での実習を計画。
- ◆ 専門性に応じた3段階のコースを用意し、関連分野外の学生の学生を呼び 込むとともに、ANECと連携しながら他大学への周知を行い、育成人数を 増やす。
- ◆ 外部の履修生への対応として、オンライン動画でも常時双方向型授業や フィードバックがスムーズにできるようMS Teamsを活用したオンライン 講義窓口を設置。

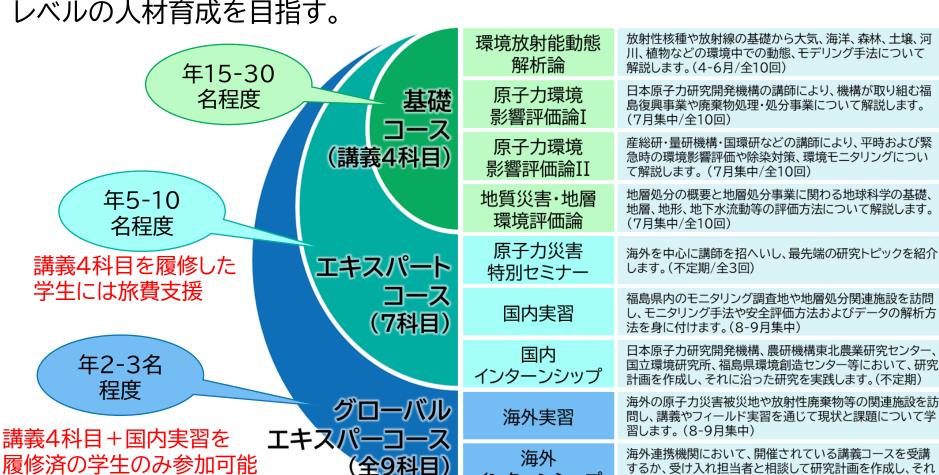
主に大学院生を対象として、原子力分野の重要課題である緊急時対 応・原子力防災・原子力災害後の環境影響評価および放射性廃棄物 の処理・処分の推進に貢献することのできる人材を育成する。



### 教育プログラムの概要

国内外の連携機関の協力のもと、機関横断的な教育プログラムを実施。

専門性に応じた3段階のコースを設定し、専門外の学生に対する原子力分野へ の関心や貢献への動機付けから、今後の原子力課題を担う専門家まで、幅広い



インターンシップ

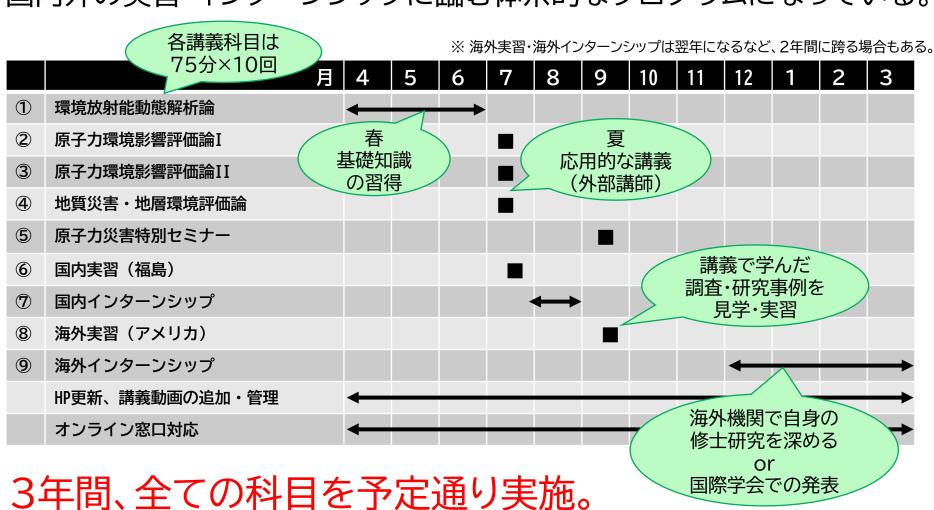
するか、受け入れ担当者と相談して研究計画を作成し、それ

に沿った研究を実践します。(不定期)



### - 年間スケジュール

1年を通じて基礎的な講義から外部講師による応用的な講義を経て、 国内外の実習・インターンシップに臨む体系的なプログラムになっている。





## 優修生人数の推移

	R4	R5	R6	合計
グローバルエキスパート	1	5	3	9
コース				
エキスパートコース	2	6	7	15
基礎コース	7	8	13	28
1科目以上参加実人数	40	62	54	156
1科目以上参加延べ人数	137	167	170	474
学外者数	3	5	13	21
学外者所属	東北大学京都大学	東北大学京都大学近畿大学	東北大学 京都大学 埼玉大学	
ANECのメーリングリストや 学会・研究会での周知により、 年々他大学や一般の方から の参加が増加。		福井大学	信州大学 東京工業大学 北海道大学 関西電力 東京電力	



### ・ 履修生の主専攻

グローバルエキスパートコース	地球科学、環境科学
エキスパートコース	地球科学、環境科学、山岳科学、 原子核工学、量子エネルギー工学、 化学、総合理工学
基礎コース	地球科学、環境科学、化学、 経済経営学
1科目以上参加実人数	地球科学、環境科学、山岳科学、 化学、応用理工、物理学、数学、 リスク・レジリエンス工学、機械知能工学、 機械システム工学、構造エネルギー工学、 社会工学、 生物資源科学

地球科学・環境科学・原子力工学を中心に、化学・物理学・山岳科 学・生物資源科学・経済経営学など幅広い分野からの履修があった。

### これまで(R4-R6)の原子力・エネルギー関係の就職先

- > 博士課程進学
- ▶日本原子力研究開発機構
- > 東京電力
- ▶ 清水建設(除染関係環境コンサルタント)
- ▶日立製作所(原子力部門)
- ▶ 東陽テクニカ(エネルギー関係)
- ▶日本エヌ・ユー・エス株式会社(原子力関係コンサルタント)



### \*特筆すべき成果

- 学外の履修生の大幅な増加を達成
- 海外実習として、3年間で22機関の 訪問ができ、当初の予定を上回る充 実した実習となった
- 海外インターンシップで研究を進め た履修生(修士)が筆頭著者となる 論文が国際誌に3報出版された



Contents lists available at ScienceDirect

**Environmental Pollution** 



Changes in air dose rates due to soil moisture content in the Fukushima

prefecture forests<sup>\*</sup> Miyu Nakanishi a, Yuichi Onda b, Junko Takahashi b, Hiroaki Kato b, Hikaru Iida a,

Center for Research in Isotopes and Environmental Dynamics, University of Tsukuba, Tsukuba, Ibaraki, 305-8572, Japan National Institute of Advanced Industrial Science and Technology, Tsukuba, Ibaraki, 305-8567, Japan

Radionuclides released and deposited because of the 2011 Fukushima Dai-ichi Nuclear Power Plant accident caused an increase in air dose rates in Fukushima Prefecture forests. Although an increase in air dose rates during rainfall was previously reported, the air dose rates in the Pukushima forests decreased during rainfall. This study aimed to develop a method to estimate rainfall-related changes in air dose rates, even in the absence of soil moisture data, in Namie-Town and Kawauchi-Village, Futaba-gun, Fukushima Prefecture. Moreover, we examined the relationship between preceding rainfall (Rw) and soil moisture content. The air done rate was estimated by calculating the Rw in Namie-Town from May to July 2020. We found that the air done rates decreased with ncreasing soil moisture content. The soil moisture content was estimated from Rw by combining short-term and long-term effective rainfall using half-live values of 2 h and 7 d and considering the hysteresis of water ab-sorption and drainage processes. Furthermore, the soil moisture content and air dose rate estimations showed spod agreement with coefficient of determination (R<sup>2</sup>) scores > 0.70 and >0.65, respectively. The same method was tested to estimate the air dose rates in Kawauchi-Village from May to July 2019. At the Kawauchi site, variation in estimated value is relatively large due to the presence of water repellency in dry conditions, and the amount of 137Cs inventory was low, so estimating air dose from rainfall remained a challenge. In conclusion rainfall data were successfully used to estimate soil moisture and air dose rates in areas with high <sup>137</sup>Cs in ventories. This leads to the possibility of removing the influence of rainfall on measured air dose rate data and could contribute to the improvement of methods currently used to estimate the external air dose rates fo

Science of the Total Environment

Mechanisms of  $^{137}$ Cs leaching based on long-term observations in forested headwater catchments in Yamakiya, Fukushima Prefecture, Japan

GRAPHICAL ABSTRACT

Taichi Kawano a, Yuichi Onda b, Hiroaki Kato b, Junko Takahashi

Graduate School of Life and Environmental Sciences, University of Tsukuba, Japan Center for Research in Radiation, Isotopes and Earth System Sciences, University of Tsukuba, Japan

 We explored water chemistry and sea-sonal <sup>137</sup>Cs changes in headwater catchments,

K+ correlate positively, with no NH4+

tration in headwater streams 1.5-2.0x. The closer to the spring, the lower K<sup>+</sup> conc. and temperature dependence of <sup>137</sup>Cs.

Contents lists available at ScienceDirect

Satellite remote sensing model for estimating canopy transpiration in cypress plantation using in situ sap flow observations and forest inventory

Asahi Hashimoto\*, Chen-Wei Chiu\*, Yuichi Onda\*, Makiko Tateishib, Kenji Tsuruta

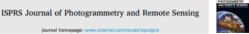
\* Center for Research in Isotopes and Environmental Dynamics, University of Tsukuba, 1-1-1, Tennodai, Tsukuba, Ibaraki 305-8572, Japan <sup>b</sup> Research Administration Center, Kyoto University, Yoshida-Honmachi, Sakyo, Kyoto 606-8501, Japan <sup>c</sup> System Analysis Division, Lake Biwa Environmental Research Institute, 5-34, Yanagasaki, Otsu, Shiga 520-0022, Japan

Graduate School of Bioagricultural Sciences, Nagoya University, Furo-cho, Chikuso-ku, Nagoya, Aichi 464-8601, Japa

Transpiration (Et) in forests accounts for a significant fraction of evapotranspiration. However, because Et is nfluenced by meteorological factors and the physiological response of vegetation, developing an accurate model ingle forest species. The contribution of Et to meteorological (Et<sub>boss</sub>) and plant physiology (Et<sub>bos</sub>) was determine using the decoupling more along with the states temperature. Using the Forest investory  $(r_1)$ , in which the settlent of growth of each species, including cypenes, was surveyed and Land Bernieds Seining instagers of the FI range was obtained, as index of activity estimation for cypens trees was developed. The superoid series, which significantly influences E<sub>L</sub> was calculated from the tree age obtained from FI or diameter at breast height and incorporated into the model. The developed model exhibited a high correlation of r = 0.74–0.88 with the measured £t. The antecedent precipitation index (API), which represents the wetness of the land surface, can be used to evaluate the confidence level and correction coefficient (if needed) of model estimates. When corrected by API, Er could be estimated with even higher accuracy (r = 0.76-0.89). The model developed in this study by Not, at course we summere with even inguier secturity (r = 0.70-0.09), the moore develope in this study considers the physiological responses of vegetation and plant species, and the same approach can be used to develop models to estimate £t for other tree species. Additionally, our model uses reflectance at wavelengths close to visible light and surface temperature and can, therefore, be readily applied to other remote sensin methods, such as unmanned serial vehicles and airborne methods. The model developed in this study can be used with FI data to estimate & by tree species to provide detailed and accurate estimates of &.













### 令和4年度海外実習

履修生8名 (学外3名)











コロナ禍終盤の時期であり、フライトの欠航・遅延でマサチューセッツ工科大学の原子炉見 学キャンセルなど大幅なスケジュール変更を余儀なくされたが、充実した実習となった。



### 令和5年度海外実習

履修生13名 (学外3名)

















コロナ禍も落ち着き、最多の参加者であった。この実習を機にウィーンへの留学を決める学 生が出るなど、高い教育効果が確認された。



### 令和6年度海外実習

履修生10名 (学外7名)

9/19 Rocky Flats

















実習後、訪問したコロラド州立大学の大学院生が来日し、本学でひと月間の研究を行うなど、相互の交流が実践できた。

## 実習レポートより

- 今学期勉強した講義資料の中の抽象的な内容を実際的に、具体的に理解できたことが大きな収穫だった。
- (モンテリ地下研究所・グリムゼルテストサイトについて)知識として知っていたガラス固化体などにすることなく使用済み核燃料をそのまま処分するスイスの地下処分方法などを直接見ることができ、非常に有意義であった。
- (Savannah River Siteについて)廃炉にするのに多額の費用がかかるため、周りをコンクリートで固めてしまおうという考えは、非常にアメリカらしいと感じた。それでも、まさか原子炉自体を固めるとは思わなかった。同じものを対象にしていても、国によってその扱いが大きく変わることが非常に興味深かった。
- **コロラド州立大学**では、特段セキュリティが厳しそうな様子ではなかった通常の実験 室でプルトニウムの実験が可能であり、文化の違いを大きく感じた。
- ハンフォード・サイトの見学で最も記憶に残っているのは、遅延解体の選択で石棺にされた原子炉である。遅延解体を選べたというのはアメリカ(や諸外国)ならではだと感じた。
- オークリッジやハンフォード・サイトでは、マンハッタン計画の一端と現在まで続く環境影響・先住民が受けている余波を知ることができた。1F事故による環境汚染と元核施設の環境汚染は、見た目では似たような問題に見えるが、解決すべき課題の毛色が異なり、改めて日本に焦点を当てて取り組んでいく必要があると認識できた。



- (原子力工学専攻の学生より)本プログラムの一連の活動により汚染地域への対策の在り方について考え方が変わった。プログラム参加以前は、環境被害が生じた地域については事故が発生する前の状態に復元することが目指すべき目標であると考えていた。発生した汚染土壌を回収しCsの除去処理を行ったのち再び環境に戻すことが必要でそのためには効率的で低コストの処理方法の研究開発が求められていると考えていた。しかしアメリカでは過去の汚染事故に対し何か特別な処理を行っているわけではないことを知った。
- その代わりにモニタリングにより放射性核種が人間社会に影響を及ぼさないことを確認する作業に注力しているようであった。アメリカの考え方に触れ、福島での目標は事故前に復元することではなく現状に適応することであると考えるようになった。適応するためにはモニタリングを通じて現状の理解、そして未来の予測を行うことが新しい適応方法を考えるうえでの基盤になると考える。本プログラムを通じ、環境モニタリングの重要性をより深く理解できた。
  - ✓ 講義で学んでから実際に見学・実習することは非常に学習効果が高いこと
  - ✓ 海外で日本とは異なる文化・自然環境・研究規模・対策方法が取られていることを実感し、新たな考え方や視点が生まれていること
  - ✓ 環境科学・地球科学・原子力工学が連携することで、深い相互理解が生まれていること

などが確認できた。

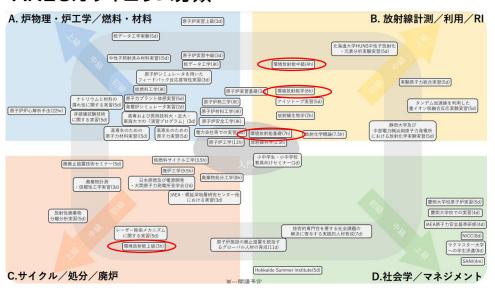


### 本プログラムの今後の在り方

#### 令和7年度:

国際原子力人材育成イニシアティブ事業の公募があれば、応募を予定。 ただし、講義5科目および国内の実習・インターンシップは補助金の有無によ らず継続する。海外の実習・インターンシップは、補助金の有無および採択時 期によって実施を決める。

#### ANECカリキュラム分類



https://anec-in.com/cms/wpcontent/themes/anec/img/curriculum/curriculum.pdf ANECの中でもすでに20時間の環境放射 能関係科目がカリキュラムに組み込まれて いるが、本プログラムが特化している放射 性物質の長期環境移行はこれを更に強化 できる。

とくに、環境モニタリングは原子力被災 地における地元住民との対話の成功と失 敗を分ける鍵となり得るため、その重要性 を伝えることに尽力したい。

ANECとより連携を強化しながら今後も プログラムを実施し、福島復興・放射性廃 棄物の処理処分・原子力発電所の再稼働 に貢献できる人材輩出を目指す。



### ・ 今後の取り組み (ENEP 筑波大学)

- •内的•外的環境: 原子力施設の再稼働ー>原子力施設での 環境モニタリング、原子力緊急時対応をより重視する。廃止措 置への対応
- ・求められる役割:放射性物質の長期環境動態の理解の上での モニタリング、廃止措置、廃棄物処分を考えられる人材の輩出
- 運用方法: 引き続き外部からの参画を推奨する
- 規模感: 3-5名程度
- 教育対象: 大学院生の輩出ー>マネージメント層を中心に
- 運用: ANECとの連携強化